

近代の抒情

三好行雄著



塙書房



三 好 行 雄 (みよし・ゆきお)

略 歴

1926年 福岡県に生れる

1950年 東京大学文学部国文学科卒業

東京大学名誉教授，昭和女子大学教授，1990年逝去

主 著

『島崎藤村論』（至文堂，1966，筑摩書房，1984）

『作品論の試み』（至文堂，1967）

『日本の近代文学』（塙書房，1972）

『日本文学の近代と反近代』（東京大学出版会，1972）

『芥川龍之介論』（筑摩書房，1976）

『鷗外と漱石 明治のエートス』（力富書房，1983）

近代の抒情

1990年9月20日 第1版第1刷

著 者 三 好 行 雄

発 行 者 白 石 タ イ

発 行 所 株式会社 塙 書 房

〒113 東京都文京区本郷六丁目8-16

電話 編集部 03 (811) 0514

営業部 03 (812) 5821

振 替 東 京 0-8782

シナノ印刷・弘伸製本

検 印

廃 止

定価はカバーに表示してあります。落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-8273-0065-8 C3091

近代の抒情
目次

I

近代詩の源流……………五

一、もうひとつの〈蘭学事始〉……………五

二、和詩の伝統……………三

三、新体詩から近代詩へ……………六

新しきうたびとの群れ——詩人藤村とその時代……………三

一、明治の青春——『文学界』と北村透谷……………三

二、恋愛と漂泊——藤村の浪漫精神……………七

三、漂泊者のモノローグ——『若菜集』の誕生……………四

四、詩から散文へ——『落梅集』と『緑葉集』……………五

五、詩と歌曲——「荒城の月」と「人を恋ふる歌」……………七

六、伝統詩歌の革新——明星派と根岸派……………六

七、戦争と新体詩人たち——晶子・楠緒子と未醒・鷗外……………六

八、田園の抒情——『文庫』の詩人たち	七五
--------------------	----

大正期の詩壇	八三
--------	----

光太郎の近代	一〇一
--------	-----

朔太郎の〈疾患〉	一〇六
----------	-----

室生犀星の抒情	一二七
---------	-----

宮沢賢治の〈修羅〉	一三三
-----------	-----

認識者の抒情——中原中也と立原道造	一三八
-------------------	-----

戦争と詩人——北原白秋と高村光太郎	一三九
-------------------	-----

戦後詩の出發・素描	一四〇
-----------	-----

白秋と茂吉——観潮楼歌会以後	一五九
----------------	-----

斎藤茂吉の近代	一七〇
---------	-----

反近代の詩——正岡子規と高浜虚子	一八五
------------------	-----

II

漱石・鷗外における〈詩人〉	一九九
---------------	-----

霧黄なる市に——漱石と子規	二〇六
---------------	-----

〈杳な心〉の詩——『思ひ出す事など』をめぐって	二六
戦場の詩——森鷗外『うた日記』をめぐって	二六
芥川龍之介における〈詩人〉	二七
一、抒情詩について	二七
二、我鬼の句	二九
井上靖における〈詩人〉——詩集『北国』をめぐって	二五
文人の詩——小説家における〈俳〉	二七

III

藤村詩鑑賞	二七五
初恋……	二七五
潮音……	二八〇
小諸なる古城のほとり……	二八五
白秋詩鑑賞	二八六
銀笛……	二八八
光太郎詩鑑賞	二九三

【道程】

根付の国……	二五四
寂寥……	二五六
河内屋与兵衛……	二九〇
父の顔……	三〇五
あをい雨……	三二〇
さび	三二〇

しきみち：三九 冬が来た：三四 道程：三七
 『道程』以後 雨にうたふるカテドラル：三三 ぼろぼろな駝鳥
 ……三六

『智恵子抄』 涙：三四 あどけない話：三四 レモン哀歌：
 三四七

『典型』 「フランデンブルグ」：三五 典型：三六

達治詩鑑賞 ……三六

鹿：三六 獅子：三七

三十年後の感想——中城ふみ子について ……三八

季語雑感 ……三六

詞華鑑賞 ……三九

柔かき苔に（有明） ……三九 三足ふた、び（楠緒子） ……三九

今はた秋も（春夫） ……三九 赤羽根のつゝみに（子規） ……三九

我いきを（登美子） ……四〇 夜の帳に（晶子） ……四〇

ふふむ薔薇（鷗外） ……四〇 書の上に（鷗外） ……四〇

ああ接吻（牧水） ……四〇 かにかくに（勇） ……四〇

新内の唄の（勇） ……四二 ともすれば（かの子） ……四二

ものかくと（阿佐緒） ……四二 わたつ海の（白蓮） ……四二

近代の抒情

I

近代詩の源流

一、もうひとつの〈蘭学事始〉

わが国の近代詩の夜明けが明治十五年の『新体詩抄』とともに始まったという通説を、さしあたって否定しておく必要はない。『新体詩抄』は外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎という、初期の啓蒙主義を代表する東京大学の開明学者たちが〈明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ〉という明確な判断と〈西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出〉すという果斷な意図のもとに編んだ創作詩五編、翻訳詩十四編のアンソロジーである。日本の詩が西洋を方法として領略した、最初の試みだった。しかし、明確な意図の有無は別にして、西洋の詩との接触が『新体詩抄』以前に皆無だったわけではないし、それはまた、『新体詩抄』の出現に必要な前史でもあった。以下は新体詩以前における西洋との出会いの痕跡を、蘭学者（洋学者）による訳詩の試みを通じて概観しようとする素描である。

*

『解体新書』の共訳者のひとり、蘭化前野良沢が將軍家治から、フランス製の銅版画に添えられた画賛の翻訳を命じられたのは、『解体新書』の完成に五年おくれた安永八年であった。賛はラテン語で書かれていた。オランダ語は読めても、ラテン語はもとより不習熟の言語である。〈蓋羅甸言者。拂郎察言語之所由出。而古雅簡正其義最深奥

也。故雖拂郎察及和蘭等人。而非學者則無知之者矣。況於吾崎陽乎」という良沢の困惑は察するにあまりあるが、
《君命不可固辞》、良沢は刻苦して《尋其訓。寢搜其義》し、それを漢文訓読体で訳した。『西洋画賛訳文稿』の一篇である。⁽¹⁾ なかに、脚韻を踏む二、三の詩句があった。《是詩の類なり。則言外の意味ありて浅見を以て叨にこれが説を為べからず》という認識から、良沢は詩によつてそれを訳そうと考えた。そのとき、かれの手持ちの唯一の詩の形式は漢詩であつた。「四字号」の例をあげる。

《瞻彼淵潭 漁者施罟 難哉難哉 水底之窟 擊石于隤 其声孔鑄 於物魚躍 水面之瀾》

原文は《surde scit sonitus ad petras e gurgite piscis / Ascendis mille capitur molimine in undis》と表記される。田中秀央氏の直訳によれば、

《魚は水中より岩上の音を聴き取ること幽かなり。浮び出づれば、水中に於ける柔かき働（網または釣糸のこと）により捕へらる》

未習熟の言語をあいどつた悪戦苦闘の成果としてどう評価すべきなのか。いずれにせよ、良沢の訳の正誤、巧拙を品鑑できるとは思わないが、かれはむしろ、西洋の詩を漢詩で翻訳可能だと考えていたわけではない。両者の感性的ないし詩的な対応などまったく信じていなかったことは、《姑く韻語を用て其訳を録して其篇を具へ、以て博雅の明弁を俟つ》という自注にも明らかである。

享和元年に、ケンペルの『日本志』の一部を『鎖国論』と題して訳出した志筑忠雄も、原文に引用されているウィルギリウスの「農業詩」(Georgics) 第一篇だけは、おなじく漢詩(詞)訳を試みている。

《国土の異に随て其産なる所種々の本草有り種々の禽獸有り種々の金石有り天下苑上歡樂の地といへとも悉皆万殊その前1備へて具足なる事いなき物1そ有る

此有饒禾稼彼有美蒲萄

印度出象牙沙巴產名香》

原詩は〈Hic segetes, illic veniunt felicius Uvae ;/India mittit Ebur, molles sua Thura Sabae〉。沙巴はベンアラビア南西部の古代国家である。忠雄にとって必要だったのは、東インドとシバを比喻とする近代経済学の論理であつて、詩趣ではなかつた。蘭詩自体についての知識は良沢に比して格段に進んでいたはずだが、⁽²⁾それにしても漢詩で西洋の詩が訳せると信じていたかどうか。あるいは、訳そうとさえ、まだ考えていなかったはずである。事態は良沢の場合とおなじように必要に応じた当座の処置にとどまっていた。もちろん、韻律についての顧慮などは最初から関心の外にあつたのである。

《書中一五言対句の如き物有り是ハ詩文なれとも彼方一五言七言などの事などの有るに碍らば只其言の数偶相似るを以て助詞の数一て一二の添減して⁽¹⁾照応をなさしむるの、也惣て彼方一ても詩ハ韻脚確れとも今は書に出るハ詞の類なる故韻脚はみへ次》(例言)

良沢や忠雄は、詩の翻訳に散文とは別な形式が必要なことを直観していた。しかし、漢詩はまだ、西洋の詩を訳すための方便にすぎなかつたのである。

*

良沢の労作から数えてほぼ三十年後、文化七年に、大槻磐水が『蘭詩訳文 長短句法』の稿を遺している(『磐水存響』所収)。杉田玄白と前野良沢に蘭学を学び、師の通称からそれぞれ一字を藉りて玄沢と称したという磐水は、西洋の詩の翻訳においてはまさに出藍の弟子であつた。

《刀圭之子恒有教諭。爾耽酒必招戲損。又近淑女沉湎無度。二者嚴禁務其遠。我若莫樂流霞之趣。加之不愛清揚

婉。人間處世何以欣慕。君且去矣我不轉。》

酒と女の度がすぎる、身体のためだ、きつと慎め——医者いつもの台詞で、とはいえ、酒が無くて、女がいなくて、人生なんの喜びがある。俺は嫌だよ、変えないよというのが一篇の趣意。オランダ・カピタンのハルマーズⅠから贈られた詩篇の訳である。ちなみに、杉本つとむ氏の紹介による原詩の直訳を示せば、次のようになる。⁽³⁾

《医師我二恒ニ言タリ、酒ガ我ヲ死ナス可キコトヲ。医師我ニ女トノタワムレヲ、キビシク禁ジタリ、モシ吾酒ヲヤメ、且ツ美女ヲ棄ツルベクンバシカレバ、サヨナラト医師ニ挨拶^ジヲナシ、ムシロカエツテ吾ハ死スルヲコソ願フナレ》

磐水の子、大槻玄幹はおなじ詩をつぎのように訳した。長歌体の訳も残されているので、あわせ掲げる。

《くすしがわれにつけつるは酒は我身をやるなり女はいたくいましめよさる物ながら我身いま酒と女をた、れながいけるかひだになきつ、もいとままうして死ぬべきに／医師便々恒諭我嗜酒将来破我身況又休沈溺女子風味嬌態惱殺人我今却從夏禹戒生涯爲背貴妃嘸一朝分手賀君去不恨泉下避囂塵》（『蘭園日抄』）

長歌訳には、かけことば風な技巧の片鱗もみられ、漢詩訳は七言古詩の体で、偶数句が韻（平声真韻）を踏む。

西詩の翻訳は父子二代にわたる（へ文学）として伝承されたわけだが、『西洋画賛訳文稿』からの三十年間にどういう試みがくりかえされてきたのか、資料がとばしすぎて詳らかでない。しかし、ズーフの詩を訳した大槻磐水は、良沢や忠雄に比してはるかに明晰に、文学としての翻訳を意識していた。みずから説いて、つぎのようという。

《今倣西土之詩體。以爲訳文焉。彼之詩體。作例雖許多。此體者。七言古長短句之類也。第一句八言。而與第三

句八言。通韻。第二句七言。而與第四句七言。通韻。下四句與上四句。同矣。押韻之法。如右。大凡用二韻。

猶此方之用平仄二韻。而八句之詩者。上四句起承。而下四句轉合也。茲所譯詩。亦模其法。八言之句。皆用去

聲遇韻。七言之句皆用上聲院(イェ)（阮？）韻。且其韻字。盡寫近彼之音韻者。以視于同志之徒。照于原詩。可觀覽。》
 磐水は稚拙なりに原詩の韻法を分析し、《其法ニ模シテ》翻訳を試みたのである。それを可能にしたのは漢詩への信頼であった。《其韻字ハ尽ク写シテ彼ノ音韻ニ近シ》という明確な自覚がある（論・度・趣・慕の去声遇韻が原詩の -yd, ed の脚韻に、損・遠・婉の上声阮韻がおなじく -en の脚韻に対応している。ただし轉は上声銑韻）。原詩の metre（韻律）と rhyme（脚韻）を、漢詩の平仄押韻に移すのに成功したとの自負である。

磐水はまた、《同志之徒ニ視シ、原詩ト照ラシテ觀覽スベシ》ともいう。西洋詩の翻訳はもはや、良沢や忠雄の場合のように、必要に迫られた偶然の所産ではない。より意図的な、目的や趣味をひとしくしたグループの存在が暗示される。まだ蘭学者仲間の知的遊戲にすぎなかったにしても、彼我的感性の等価の対応を信じて、西洋の詩との出会いに一步踏みだしてゆく文学意識の成立を確認できるのである。この知的共同体の延長上に S. S. グループを位置付けることもできよう。

*

蘭学者を中心とする一種のプロジェクトチームが組まれた例として、ほかに『三国祝章』が報告されている。『蘭詩訳文』にややさきだつて編まれた『三国祝章』（大槻平泉編）は、文化二年、仙台藩主伊達周宗の祖母の還暦に際し、オランダの士官バロン・ハン・バブストが献上した祝賀の詩を長歌体および漢詩体で訳したもの、岡村千曳氏や杉本つとむ氏によって、その全容が明らかにされている。⁽⁴⁾

巻頭にオランダ語の原詩を掲げ、通詞の馬場貞歴による直訳がまず示される。

《奥州の祖母君六十の御賀に大槻民治の為に作る

於ウエースタントの柱ウエースタントは国君孫にして幼なき時を云 国人倚る所の頼み此家を有つのために択れて